



## 二十一世紀の哲学と宗教

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ヴァルデンフェルス, ハンス, 花岡, 永子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00006202">https://doi.org/10.24729/00006202</a>

# 二十一世紀の哲学と宗教

H・ヴァルデンフェルス著  
(花岡永子訳)

味するか、という三つの問題であります。

しかしながら、二十一世紀の具体的状況が問題でありまして、私たちは、文化的に刻印された特殊社会としてと同時に、世界共同体としても、二十一世紀へと近づいて行っているのであります。地球の全体性という立場と地方性という立場、あるいは一と多という立場の緊張は、本当に根本的な未来の緊張の一つを表現しております。

命題一、「哲学」とは、根源的には、ギリシアとその後の西洋の思想のうち、その故郷を持つ概念であり、また、人間が自らの根源と目的を、つまり、生の意味をめぐって包括的に思惟する努力を表わす。

## (1) 「哲学」という言葉

「哲学」は、「智慧への愛」を意味します。世界の背後に隠れ、何よりも人間の生の内に存在し、働いているあの智慧であります。学問的には、西洋人は、「ロゴス」や一切の存在を包括する「理性」について語ります。西洋人のキーワードは、従いまして——ロゴスに並んで——存在であります。存在論が問題である訳です。しかしまた「宇宙」のロゴス、つまり宇宙論や人間のロゴス、つまり人間学が、生命のロゴス、つまり生物学等々が問題であります。

## I 講演のテーマを考えるにあたって

「二十一世紀における哲学と宗教」という問題は、厳密に考えてみようとする大変難しい問題です。この問題について考察する前に、短い命題の形式で前提となる色々の問題を説明しておきたいと思いません。前提となる色々の問題とは、一、哲学とは何か、二、宗教とは何か、三、現代の多元主義の地平において、これら二つの問いは何を意

一九九六年十一月二十一日に、ドイツのボン大学の大学院大学部と大阪府立大学大学院人間文化化学研究科との間に、学術交流協定が結ばれた。その第一回目の行事として、日本に在留中の、ボン大学大学院大学部の代表者であるハンス・ヴァルデンフェルス(Hans Waldenfel's)教授の講演会が、一九九七年三月二十一日に本学の学術交流会館で開催された。本学大学院人間文化化学研究科にとっては、これは記念すべき学術交流協定の第一回の講演会であったので、通訳した花岡の翻訳文で、特別の配慮の下に本紀要に掲載して頂くことになった。

関係者の方々に對しまして、ここに厚く御礼申し上げる次第である。

## (2) 存在論と神学

根本的な問題は、どこからという由来の問題であります。ここでは、次のことが根本的な答えとなります。即ち、人間は人間自らの創造者ではなく、自らの根源と生成において、自らを超えているということが答えとなります。西洋の文化にとって——存在と並んで——数世紀にもわたって根本語となった第一原因(Prima causa)や究極的目的(Ultimus finis)には、「神」があげられてきました。哲学的には、存在論に神学が同じように本質的なものとして加わってきた訳です。

## (3) 確実性

近代において、神への問いが「無」の中へと溶解した中で——このことは、ニーチェの「神は死んだ」という言葉のうちに最も印象深く表現されているのであります——西洋の人間は、新しい確実性や視点を、同一性と結合性を、また意味と成就を求めています。統一性の喪失に直面して、理解と対話の可能性が求められ、責任ある行為やその規則が、また責任の方向づけへの問いが求められています。新しい問いは、認識批判、言語分析、対話論として倫理学と名づけられています。

## (4) 地域的な問題

更なる問題が加わってきます。「哲学」は、確かに、概念的—意味論的にある一定の世界の中の地域に属しています。従って、次のことが吟味されなければなりません。即ち、「哲学」が、西洋で理解されているように、他の諸地方にも伝えられるかどうか吟味されなければなりません。哲学の概念が、単純に翻訳されて、これが他の諸地方

へ伝えられた訳ですが——これは屢々精神的な植民地主義であると批判されましたが——、この精神的な植民地主義でもって、ヨーロッパは全世界の尺度を持ち、道案内人であると公言しているのであります。

しかしながら、世界の他の諸地域が——例えば日本や中国が——彼らの根源から、自らの国の歴史の中で、右に挙げた問いを自らの問題としているかどうかは疑問であります。ヨーロッパ以外の諸地域は、世界や人間の実存の根本的問いを、恐らく全く別様に見てきたのでありましょう。そこで、宗教と哲学に対する宗教の関係を明らかにすることが助けとなります。

命題二、「Religion」という言葉は、根源的にはラテン語から出て来ているが、このラテン語( religio )は、一般化してゆく組織概念とか制度上の概念としてではなく、行動の概念として使われた。そしてこの行動概念は、神や神々に対する人間の関係にかかわり、また聖なるものとか超越的なものとの、つまり、世界や人間を支える根拠と関係しているのであり、共同体的で歴史的に把握しようような成果(教理や儀礼や組織等々)とは二義的にしか関係していない。

## (1) 行動を表わす概念(行動概念)

宗教を理解することは、大変複雑となります。宗教という概念は、西洋—地中海地域では、キリスト教よりは古いのです。キリスト教そのものにおいては、「宗教」は先ず、「神に対する人間の正しい関係」を、また「正しい神崇拜」を表わします。キリスト教圏内では、宗教は、常に神関係と同時に一神教的な神理解を含んでいます。

## (2) 「諸宗教」

複数の諸宗教は、種々様々な時代に見られました。即ち、イスラエルの地域や地中海あたりのキリスト教の神以外の神々の崇拜として、またその後はキリスト教のケルト的・ゲルマン的地域で、またアブラハムに従った諸宗教（ユダヤ教、キリスト教、回教）の競合におけるヨーロッパの中世において見られました。諸々の発見以降は、豊富な諸形態が「積極的には神崇拜が、消極的には迷信あるいは偶像崇拜が」アメリカやアフリカ、就中アジア等で見られました。しかしアジアで、宗教の見方が、その後徹底的に変わりました。「諸宗教」は、それ以来、個人的な生の比較の中で複数で現われてくるのではなく、先ず団体的・集团的に、つまり、組織の形、教理内容、儀式等々を伴った神崇拜の諸制度として現われてきます。この時以来、神への問いが、宗教への関係の中で新しく立てられるようになります。神への問いは、私達の時代には、その最も明白な表現を、宗教としての仏陀の道を根拠づける中で問題とされてきました。

## (3) 内と外の「宗教」

ある新しい状況が次の事からも結果してきました。即ち、一つの宗教は、意識的に、局外者の視点からも「内部の人」乃至は当該の宗教に属する人の視点からも見られることができるということによってあります。——現代のヨーロッパでは、正に現在経験され得るようになっています。——人々が自らの宗教から自由となり、「教会から脱会」し、宗教が段々と選択の事柄となり、人間の決断の事柄となり、更に、二つの宗教に属することが可能となる場合には、状況は尖鋭化します。

## (4) 宗教批判

「宗教」が哲学的思惟の前段階として理解された時代は、宗教批判をしたコント、フォイエルバッハ、マルクス、フロイト等々が代表して主張したように、その間に過ぎ去ったと言えましょう。宗教は、通例は、次の点で一致しています。即ち、宗教は、世俗世界とか人類を包括する要請からは解放されており、従って人間的な企てではないという点で。このことは、しかし、次のことを意味しておりません。即ち、諸宗教は種々な仕方、哲学への関係を規定してきたということ。宗教批判の問題、つまり、「宗教とは本当は何であり、何を意味しているか」という問いは、兎に角、いつも立てられるべきではありません。しかしながら、ここでは同時に、真の宗教の基準が問われるのであります。これは、今日、世界的規模で取り扱われている一つの問いであります。

命題三、二十一世紀へ向けての変化は、本質的には、次の事実によって刻印されている。即ち、一つの世界であるという理念（これは地球的視点）は、ある包括的な、一切の生の領域を規定しつつある多元主義に対して強度の緊張の中にあるということによって、刻印されている。というのも、この多元主義は、一つの世界を、世界における諸地方の多様性の中へと離散させ（これは個別的視点）て、根本的な統一性を無効にし、引き裂こうと脅かしているからである。

## (1) 「多元論」

これ迄の色々な時代においても、多数の民族、多数の宗教、そして多数の文化が存在しました。しかし、この多元論は、通例、次の近し

い関係の中でのみ、実存的に重要でありました。即ち、そこで、戦争や征服が、時としてはまた平和戦術や和解戦術が、相互の関係を規定し、規則づけたような近い関係の中でのみ。その他に、世界が精神と物質の関係の中で見られたところでは、物質は多様性と分裂の原則でありました。が、他方、精神乃至は精神的なものは統一性(一)の原理でありました。世界の文化史を一層詳しく観察してみると、精神と物質の関係がそれ自身の側で相対化されると初めて、両者の関係は多元論の極に達していることが分かります。が、この多元性は、その場合、物質の領域のみならず、精神的な諸関係をも規定しています。この連関の中で、一元論と二元論の一元論と多元論の関係に対する問いが、今日、新たに立てられるのであります。

## (2) 「理性」

西洋世界を見てみると、唯一の神が問いと化し、あるいは全く否定されたところでもまた、すべてを合一し、文化を超える原理として働いていたのは、何よりも先ず理性でありました。この点で、世界的規模で有能な近世の西洋においては、今日、二つの局面が区別されることができます。(a)近代の啓蒙の局面であります。が、この局面においては——カントが導き入れたあらゆる批判にも拘わらず——人間の実戦的・技術的な理性と同様、理論理性の要求がなされるように思われました。(b)今日、広く「後近代的」と特徴づけられている局面であります。私自身は、西洋的——キリスト教的な神学の視点から、時代史的な展開を次のように考えてきました。即ち、ヨーロッパ的・キリスト教的な近代は、今日では——西洋的に言えば——キリスト教全盛以後の近代から解き放たれていると。従って、私は次のように考えていま

す。即ち、キリスト教は、積極的にも消極的にも包括的規範で有効であることを締め、その代わりに——他の規範の要請に答え得るよう競い合いながら——他の諸要請の中の一要請となってしまう、そういう時代と世界に私達は生きていると考えています。

## II 宗教と哲学

ここまでの考察の中間的成果として、次のことを確認しておきます。(1)右に巾広く語ってきたように、宗教と哲学の関係は、尚、常に多様に——むしろ無思慮にと言った方がよいでしょうが——ヨーロッパにとって有利な条件の地平でもって考察されてきました。地球規模で、即ち、全世界で多元的に規定されるべき地平での、またある一定の規範を与えることから退く傾向のある一地平に向かつての変化は、普遍化されたヨーロッパ的——西洋的地平からもまた、世界の中の一地方という地平を、従ってまた個別の地平を作ってきました。以上の点を確認しておきます。

以上二点の確認は次の結果をもたらします。(2)色々な世界の中の諸地方で、ことある毎に新たに宗教と哲学の具体的関係が問われなければならぬという結果をもたらします。これについては、これ以上詳しく立ち入ることができません。けれども——再び命題形式で申し上げますと——二、三の考察の為の有利な条件と問いを述べることができません。しかしその場合、この条件や問いは、諸宗教間の議論と異文化間の話し合いの中で、賛同能力を期待しながらそれら自身の側で吟味されるべきであります。

命題四、宗教と哲学の関係は、時間的ばかりではなく、事柄の上でもまた、宗教の哲学に対する落差の中で究明されるべきである。従って、(反省的な) 思惟にはなく、知覚しつつある経験に優位が存する。

### (1) 知覚しつつある経験

宗教は人間の空想や想像の、つまり人間的な投影や人間的企ての産物ではないという洞察が、宗教の根本的な理解であります。宗教は、人間と人間を担う実在との接触から生きています。(この文章は、一見すると、二元的に響くかも知れません。しかし、そんなことはないのです。考えられた現実が、内在的であり、且つ(あるいは)超越的であるかは、また、人格的であるかそれとも非人格的であるかは、— いずれに理解されても— 余り大きな役割を演じません。) 決定的であるのは、この現実性が、直接的には迫って来ないということです。この現実性は、むしろある独自の仕方では知覚を呼びまします。日本の哲学史上では、「純粹経験」をめぐる西田幾多郎の努力が思い出されます。西田のなしたことは、西田なりの仕方では、この講演での命題に関係しています。西田のやり方は、現象学の問いに対する世界的な巾広さで知覚できる関心によって実に印象深く支えられるのであります。

### (2) 経験の優位

西田の出発点についての観察は、哲学はそもそもどこで初まるかという問いとなってゆきます。これには、二つの答えが与えられます。

(a) 初めに、非同一性という分裂の経験が、— 仏教的には— 「苦」

の経験が存します。(b) 次いで、初めに— その都度、立場に応じて— 問い、驚き、「説明」という知覚された言葉(この *Erklärung* というドイツ語は、*Klaung* [「解明」]、*Klarwerden* [「はつきりする」]、*Lichtwerdung* [「明るくなる」] について語っていることに注意して下さい) があり、ある意味では正に単純に言葉が、つまり道案内が存在します。しかしこれら二つの事柄は、西田にとっては「経験であるところのもの」へと収斂してゆきます。

### (3) 現実性の開示

さて、「純粹経験」は、人間が日々なす諸々の多様性の中で、なるほどそれ自身で伝授されて行っています。しかし、単数形でのこの「経験」は、それ以上のものを意味しています。この経験は、包括的に、人間の生活を個人的にも集団的にも、従ってまた世界をも担い、満たすような、かの経験を意味しています。西洋の宗教的言語においては、世界や人類の創造者であり、且つ救いでもある神の現実性が問題であります。他の諸宗教を顧慮すれば、それらの諸宗教においては、何が、「神」とか「創造者」とか「救い」と名づけられ、語られた現実性に対応するのが問われるべきです。事実、そうすれば、私達は、「純粹経験」から言葉へ、乃至は言語へ移行してゆくような、ある移行に気づくようになります。しかし、「哲学」は— 純粹経験とは逆に— 常に言語や言語化の一過程であります。

### (4) 「思索」

私たちが日々の言葉の中で理解しているような「思索」は、常に「熟慮している思索」(*nach-denkendes Denken*) であります。その際

に、nach-denken の "nach" は、次のように二様に規定されます。(a) 時間的には、「その後で」(danach)であり——「熟慮する思索」は、その場合には、その後で生ずる思索でありましょう(問いは、「何に向って」という問いであります)——、また(b)「反省」(Reflexion)の意味において、従って、ふり返る思索の意味において規定されます(問いは、「ふり返る」、——何に基づいて、であります)。しかしながら、この思索は、「その後で」、これこれしかじかと生じてきまます。問題は次のような問題なのです。即ち、それ自らの側で、「意識性」、「説明」、「照明」として、つまり、「純粹な知覚」や従ってまた「純粹思索」として語りかけられている、ある根源的思索によって、純粹経験は刻印されているかどうか、また、どの程度刻印されているか、という問いであります(ラテン語の "conscientia" は、「共に知ること」(Mitt-wissen)として、ここで熟慮するに値します)。

色々な文化の中にこの見地に立つ思索が存在するということは、東洋の世界と同様に西洋の世界を見れば、一層詳しく示されます。私は、日本の世界には思量と不思議と非思量の連関を暗示し、西洋の世界に対しては「誰かにお蔭を蒙っている思索」と「思索しつつある思索」との連関をそれとなく示します。「誰かにお蔭を蒙っている思索」は、次の洞察に関係しています。即ち、「思索しつつある思索」は私たちによって受け取られ、また私達はそれに対して「感謝している」という良さ根拠を持っているという洞察に。「思索しつつある思索」は、能動的に反省し、能動的に投影して企画することができるといふ人間の能力を意味します。人間は、このようにして、「受け取りながら思索することができ」、また、「能動的に反省しながら、且つ投影しつ

つ、企画しつつ思索することができる」という二重の能力を所有しているという本性として、自らを経験します。

命題五、宗教的経験の自覚は、哲学の領域に制限されず、芸術や倫理のような他の生活領域をも熟慮の内に含めなければならない。

#### (1) 「芸術哲学」

知覚(宗教の領域では自覚と言われる)に対する西洋の言語の中で使用された学問的言葉は、ギリシア語に由来しており、「芸術哲学」、「知覚の芸術」と呼ばれます。勿論、この言葉は、——それが対応する日本語の言語領域をも示しているように——言語的知覚と結合しているというよりは、むしろ、一般的に感覺的な知覚と、従って、描出や絵画や音楽や演劇というような豊かな形態における芸術や能力の知覚と結合しており、また、詩や文学における言語的なものになる過程での芸術や能力の知覚と結合しています。宗教が理論的な反省の領域と、従って教理と——私はまた、倫理的な行動の仕方の領域をも追加する訳ですが——一面的に結合することがなければ、宗教の完全なる輝きが実るのであります。簡単に言うと、宗教は、神学や倫理以上なのであります。

#### (2) 二者択一的なものとしての芸術

芸術的なものを一層厳密に内容上規定する場合には、芸術が、宗教と哲学の領域の中に二者択一的に入ってきます。思索は自らの仕方と根源性を自らに求めることができぬのかというならば、芸術的なものに係れば、眼を自由にして、能動的で瞑想的な、探求的現実性の

入口に到ることができません。何故ならば、確かに一方では、芸術と芸術生活の諸形態がありますが、しかし他方では、芸術や芸術生活を享受する人たちはもつと多いからです。例えば、自らの宗教の豊かさを、あるいはカトリックのキリスト教の豊かさを新たに認識させるのは、多くの西洋の人々にとっては、アジアの芸術との出会いであり、また禅の日本的な道との出会いであり、インドやチベットや中国や日本の瞑想や観照の諸形式との出会いであり、また、まわり道をしての非常に心を開き難い儀式の領域と出会うことであるという事は、全く驚くに足りないことであります。新しい芸術の発見に際しては、単に身体的な感性の再発見のみが重要では決してなく、色々の宗教の多くの神秘家たちに見られるであろうような内的な感覚の展開が、つまり、聞くことと見ることの、ものを味わうことと試食することの展開が重要なのであります。

### (3) 治療学としての芸術

「芸術」——「知覚」——というドイツ語に関して、問題が「真に受け取る」ということである限り、他の言語に対して独特な主張が可能であります。この洞察は、ある独自の詳細な熟考に役立つではありません。ここで付言すべきことは、次のことで十分でしょう。即ち、真理概念は、西洋の主流の哲学においてはむしろ理論的であって、実践的ではないと付言することで。たとえ——先ず宗教的影響の下で——常に、実存的な、真理の有意義性が強調されてきたとは言え。しかし、私にとって救いとなり、成就や完成となるのが、実存的には最終的に意味のあることであります。従って、この救い乃至は成就との非同性を克服して、その結果として救いあるいは成就への道を見出すこ

とが生活においては肝要であります。この意味において人間は癒しを必要とします。しかし私たちの根本的な知覚を顧慮して、次のような問いが立てられることとなります。即ち、救いと癒しへの諸々の道は、根本的な癒しにどの程度役立つかという問いが。換言すれば、芸術と癒しの学がどの程度一つに見られるかという問いが。

命題六、多元的な分裂性の傾向をいや増しに増すであろう二十一世紀を顧慮して、哲学と宗教とは次のことを要求されている。即ち、哲学と宗教の中に隠されている治癒的な力を明るみに出すようにし、それと共に、繰り返し生じてくる倦怠と不安から人間を解放し、またその疎外から自由にすることを要求されている。

### (1) 治癒の力

芸術的——治癒的思索の発端は、哲学的思惟の発端を実在関係にまで広げますが、この哲学的思惟の発端は、本質的には言語に結び付けられています。実践は、言語を排除するのではなく、包摂します。しかし実践は、方向性を、言語喪失や沈黙へと拡大し、深めます。その結果、概念的にはもはや把握できないものが、従って正にそれ故に、治癒するものが現われて来ることができず。その際に、言語的なものの諸々の限界が、一見、思惟できるものの諸々の限界であるように見えてきます。その結果、合理主義的な楽観主義に刻印された領域においてよりは一層強烈に、言葉の脆さが、ある特有の言語悲観主義となる程に、現われてきます。しかし、諸限界を経験することは、正に、諸宗教がその宣教や約束でもってある新しい機会を見つけ出す場所でもあるわけです。ましてや、諸宗教が救いや治癒によって働き始める

時には、尚更そうなのであります。

## (2) 哲学と宗教の独立性

哲学と宗教の具体的関係は、あらゆる文化において、将来においてもまた、同様の仕方では解明されるではありません。二つの生じうる極端な立場は、どうしても避けられなければなりません。即ち、宗教が哲学の代用となったり、哲学が宗教の代わりとなることはできませんし、また宗教と哲学が同一視されることもできません。哲学と宗教とは共に――それぞれそれ自らの仕方においてはありますが――ある包括的な実在の知覚と、従ってまた人間の心の開けを用いて、その都度より大いなるものに賛同します。が、このその都度より大いなるものを、哲学も宗教も汲み尽くすことはできないのであります。先にも申しましたように、哲学と宗教とは、一般的には、自ら自身を指し示すばかりでなく、自らを越えて、芸術の広い分野をも指し示すのであります。

## (3) その都度一層大いなるもの

近世的―西洋的哲学に対して、純粋に日本的な哲学が批判を浴びせるものの中に、デカルト的な自己陶醉に対する批判があります。問いは、実際には次のような問いであります。即ち、――デカルトがこれを考え出したように――もし人間が自らの確実性を自らの「自我」に断固として捜し出す場合には、人間は、徹底的に自己陶醉的に自己を鏡に映し出すことに終わり、従ってまたある徹底的な独我論に終わるのではないかという問いであります。換言すれば、現代の人間の自己自らについての不安は、最終的には、没落しつつある西洋の人々自ら

に起因しているのではないかという問いであります。

対立的立場が、アジアから不二元論 (Advaita-Denken) を提示していますが、この不二元論は、無分別の仏教の講話の中にも出ています。結局は、無神論や無宗教性へと駆り立てられてゆく近代的―西洋的な哲学の端初とは別様に、上述のアジアの思索の端初は、その否定性の中で、即ち、否定的哲学として徹底的な開けへと開けて行きます。そして――このことは、徹底的な無我性の行動を見ると、一層厳密に実行されるであろうと思われませんが――逆説的な仕方、改めて「宗教」へと開けて行くことでしょう。

## (4) 「異質的なもの」

しかしながら、ここでもまた問いが残っています。次のような一つの中心的な問いでもって、私はこの講演を締めくりたいと思います。即ち、この見地から――具体的には――日本哲学の見地からすると、異質的な状態そのものとしての異質的な状態は、何を意味するのか、という問いでもって、ヨーロッパ的な、限られた見方を、先ず取り挙げました。この場合には至る所で次のことが示されました。即ち、ヨーロッパの人間にとって異質的なものは、自らの思惟構造に受け入れられて、異質的なものという性格を失うということが示されました。このことは、過去においては屢々むしろ無意識に、しかも悪意なくして至る処で生じました。このことは、また他の諸文化の中でも存在し、且つ生じつつあります。日本語の中国(まん中の国)という中国の理解も例として挙げられますが、また、日蓮やその後継者たちの日本中心性も挙げられます。自らの「私」が、全く他の異質的な「汝」が現

われ得ぬ程に消し去られる場合には、問いは尖鋭化します。ヨーロッパやアメリカ合衆国において、例えば阿部正雄や上田閑照において見られるように、常に歴史的過程としての実在について、つまり、歴史においてと同様社会的に働く実在と衝動としての善と悪について論ぜられてきたのも、故あってのことです。この様な問いにおいては、他者として、また異質的なものとして挑発となるような、固くて簡単には開かれない、他者や異質的なものが常に問題であります。

しかしながらこの事は、中立的なものや非人格性（異質的なもの）という意味においてのみならず、男の人や女の人として明らかに示される他の人々や見知らぬ人々（この男性である見知らぬ人、この女性である見知らぬ人）の意味においても妥当します。多元性は、異質性や他者性に対する顧慮（畏敬）なくしては、真にパートナー（伴侶）となる如何なる方法もなく、しかも、二十一世紀が、「他者」を重視する以上に、パートナーであることを重視するであろうという正に二つの理由によって、哲学と宗教にとっては、異質な実在と他者が中心点となります。ヨーロッパ的に見ると、宗教は——ヨーロッパでは、宗教は具体的には、キリスト教とユダヤ教であります、——恐らく、今日では、確かに、異質的なものの実在に対しては、哲学よりは、一層強く、敏感に反応させられているのでありましょう。